

時があつたに違ひなかつた。自分の記憶にある大伯父は、色の飽くまで黒い菊石の長面と、口の悪い別家の大伯母が名づけた「虫喰ひ天神」といった髭、「泡ふき天神」といった早口の口許。そんなもので、宛然、蝕んだ旧記を読んで辛うじて浮かぶ「物語」の人としか思出せぬ。十五代將軍に随身して江戸から下向して来てそのまゝ、長年型のやうなお山の生活を続けた大伯父。その早い頃、自分の家に入りの鶏買の男の親父文蔵の、大男の小心を愛して、己れの輿丁とした大伯父。その文蔵が或日大伯父のお伴で、その頃の彼等には覗き見も許されない東照宮の御廟前まで特に入つた時、どうした機みか、滑稽な粗忽をして、小心者の大男は真青になつて震へあがつてしまつたさうだ。それから大伯父は酒に酔ふと、「文蔵は偉いぞ。権現様に屁をかゞした。」と、大声に口外しては「殿様、そればかりは……。」と、心から慄へ怖れる大男を、且つ慰み且つ愛したといふ大伯父、——自分には所詮、旧記の中の人物だ。いま眼前の柩の中に、その人の骨肉が横たはるとは、どうしても感じられない。自分は不思議な思ひに顔を上げた。思ひ出せない女の顔が、また襖の陰から覗いてゐる。そして自分と顔を合せると、無碍の親しみを双の眼にこめて転ぶやうに近づいて来た。あゝ、鶴子だ。自分には従妹に当り、あのおそらく不幸だつた影のやうな少女が、今、二十一か二か、一人の女となつて自分に挨拶した。「よくまあお前が……」自分はうっかりかういふ言葉を出さばかりだつた。

かうした人達に取巻かれた柩の中の大伯父は、やはり自分に

は古い物語の中の人である。

(大正11年・曲水7—5)

異端漫筆

いつも、何とはなしに振返させられるのは、轆轤と軋り去る囚人馬車だ。

何日であつたか、ふとあけた雑誌に、囚人馬車を駛らせることは、首都の美観を殺ぐこと、として攻撃してあつたが、自分はそれを読んで暫く首を傾けた。

大道の黄塵、醜怪な広告、電車の混雑、古いとも新らしいともつかない洋館——もしありとするならば、東京市の美観がこれらのものよりも、もつと囚人馬車の疾駆によつて殺がれるだらうか。

先頃また、自分はさうとは頷けないが、その一派の人々から、すばらしい詩人だと賞められ、しかも愛の詩人とか稱へられてゐる某といふ人の詩集の中に、「囚人馬車」といふ一篇を見出したとき、自分は何よりも先にそこへ頁を繰つた。が、この人も通り一遍の冷たい眼しかあの馬車へは向けてゐなかつた。自分は再び暫く首を傾けねばならなかつた。

何はともあれ、自分はやはりあの囚人馬車を今もつて好む。嘗つて赤坂に住んだ頃、自分は図書館への行き復り、虎の門の石垣の下、米國大使館の門前のだら／＼坂、あのあたりで屢々囚人馬車に出会つたものだ。